

ジュリエットの美に酔うー『能・ロミオとジュリエット』の初演を観て

Fascinated with the Beauty of Dances by the Tsure: Juliet

遠藤 光

ENDO HIKARU

2015年12月8日(火)に東京：国立能楽堂で上演された上田邦義氏の新作能で一番嬉しかったのはツレのジュリエットの舞にすっかり魅了されたことであつた。若女わかおんなの面おもての上品さといい、美しい装束といい、また舞の一つ一つの動作・仕草しくさの気品といい、ジュリエットの純粹無垢な心が光り輝いていた。いつまでも見ていたかつた。演者は鶴沢久師で女流能楽師の第一人者であるとのことである。すっかりファンになってしまった。

シテのロミオの舞も見事であつた。ただ、少し風格が勝つて若いロミオが壮年のように感じられた。おそらく面が中将のように見えたことも手伝っていたせいかもしれない。いずれにしても髭ひげを蓄えていたような気がしたので、シェイクスピア作品から受けるイメージから離れているように思った。しかし、考えてみれば、元々原作では、キャピュレット家で催されたのは仮面舞踏会であつたのだから、どんな面でもよかつたのだ。その後のロミオの面がどういう面であつたか、うっかりして覚えていないが、たぶん、同じ面であつたような気がする。

僧ロレンスは、いかにも西洋中世の修道僧そのものの黒衣の質素な装束に包まれ、物語のあらすじを簡潔に語るという進行係をこなしている。これは、上田(宗片)氏の名案のうちの一つというべきもの。

42時間後には、再び目覚めるという僧ロレンスから渡された薬を、勇気をもって飲んで眠りについたジュリエットのことが、「死の知らせ」としてロミオに届くとロミオは劇薬をもって直ちにヴェローナの霊廟れいびょうに行き、横たわるジュリエットの美しさを見て「最愛いとの女むすめが妻よ。君なぜかくも美しき。二度と再び離れはせず」と最後に抱擁し、劇薬を飲んで息絶える。若者の純愛の強烈さ、切なさが胸が締め付けられた。

舞台上に設けられたベッドの上に、ジュリエットがあつた装束でどのようにして横たわるのかと少々いぶかつて観ていたら、ごく自然に、まったく抵抗感なくふわっと横たわっていた。何と見事な所作であつたことか。

町中大騒ぎになっているということで、ヴェローナ大公が橋懸かりに登場した時、その出で立ちを観て驚いた。身に着けているものは、能の装束でありながら、色といい、柄といい、正に中世イタリアの貴人ほうふつを髣髴させられたのである。しかも、面もよし、威厳のある声で、

仇敵かたき同士のご兩人。モンタギューにキャピュレット。その方たちの憎しみに。いかな

る天罰下されしか。ともに跡目を失ひし。この長年の仲たがい。見過ごしたりし我もまた。身内二人失ひし。罰を逃れる者はなく。またこれ僧侶のロレンスよ。かねて高德と聞きたるが。人力及ばぬ大いなる。力が巧みを阻みたり

と謡う。ここにこそシェイクスピアの心意が明かされてはいまいか。上田氏の意図もここにあり、と我意を得た思いであった。

もう一つ上田氏にとって欠かせなかったのは、キリの部である。地謡が

……この世に生きては純粹^{ひとすじ}に。仇を愛せる青春は。死を経て一つ安らかに。王者となりて蘇^{よみがえ}る。これぞ真^{まこと}の愛の賜物^{たまもの}。美はしき。神のこの世のお浄めと。

と謡うとロミオとジュリエットの「霊」が白装束で、頭に小さな王冠を付けて現れ、相舞を舞う。霊となった王者が一つに結ばれて喜びの舞を舞う。この白い二人の天使が舞う光景に、私はダンテの「天国篇」の感覚を重ねていた。

公演が終了して帰ろうとしたとき、隣り合わせに座っていた外国人の女性と会釈を交わしたのを機に、20分ほど座席の所で立ち話をしたのだが、今観た公演について話を聴いてみた。彼女は、35歳くらいに見えたが、あるいは40を超えていたかもしれない。能についてはかなりよく知っているようで、彼女も 'Wonderful', 'Beautiful', 'Splendid' を連発し、特に衣装については驚くほど細かく観察していて、白色は神聖 (divinity)、清浄 (purity)、高貴 (a person of high rank) を表しているとか、大公の袖口の部分に様々な色を使った刺繍のようなものがみえたが、それはヨーロッパ中世の貴族の伝統であるとか、冠がヨーロッパ式の形であったなど、私が全く見逃していた部分について細かく語ってくれた。

英会話が不得意でなければもっと色々なことが聞き取れたのにと残念であった。名刺を交換して分かったのだが、彼女の名はハイケ・ホファー (Heike Hoffer) さん。ドイツ系アメリカ人でオーボエとイングリッシュ・ホルンのプロの奏者。オハイオ州に住んでいる。どうりで、「笛の音色と自在性がよかったし、小鼓・大鼓・太鼓も、力み過ぎないので聞きやすかった」と褒めていた理由が理解できた。

最後に、お願いであるが、一回観ただけでは細かいところを随分見逃してしまったり、真意にたどり着けなかった箇所があったので、是非とも再演して頂きたいのです。白状すれば、もう一度あのジュリエットの舞が観たい！ もう一つは、「アイ狂言」の僧ロレンスの語りのすべてを謡曲 (脚本) の中に印刷して欲しいということである。アイのコトバが省略されるのは、普通のことであるらしいのだが、素人としては、いや、素人だからこそ、全体像を知りたいのである。

(実践女子短期大学名誉教授)